GAKKAN GAKUFU

40

Interview

正しい災害イメージを持つために

大原美保 准教授

動物が好きで生物学を目指して入学した大原先生が、防災の分野に方向転換したきっかけは、「社会に役に立つことがしたい」という思いからだったそうです。防災研究者として、そして一生活者として、真剣に防災に向き合う姿勢に感銘を受けたインタビューでした。

■ ご研究の一端をご紹介いただけますか。

学環では総合防災情報研究センター（CIDIR）と先端表現情報学コースに所属しています。私は工学系の社会基盤工学出身で防災計画の研究をやってきましたが、CIDIR は学環と地震研究所と生産技術研究所の三部局が連携した文理融合の研究センターですので、学環に来てからは私もそれを意識して、他分野の先生たちとも接点のある研究をしようと思ってテーマを選んでいます。

特に今、力を入れているのは緊急地震速報や、首都圏大規模水害の時の避難情報をどう使って災害を減らすかということです。情報って、ただ出しただけでは役に立ちません。それがしかるべきところにきちんと伝達されて、受け取った住民や関係者が何らかの行動をして初めて減災につながるんですが、その情報と実際の災害のイメージが結びつかないと、人は行動に移せないんですね。緊急地震速報が出て、「強い揺れに警戒してください」とメッセージが流れても、近くにある棚が倒れてくるとか、家が倒壊するという具体的イメージが持ててこそ避難し、減災できるのですが、皆さん、この災害イメージを正しく持てていないように思います。

それで最近、首都圏大規模水害が起きたら実際にどうなるかということを考えてもらうために、３D 水害可視化システムというのを作っています。海抜ゼロメートルの江東デルタ地帯で、荒川の堤防が決壊すると町がどうなるのかを見ることができます。破堤後数時間で墨田区内の広い範囲が約 2m 程度の水に覆われてしまい、事前にいち早く高い建物等に避難しておくことの大切さがわかります。歩行できる水深と流速の関係から、時刻歴での避難困難度も表示しています。全域の建物データが入っていますので、自分の居場所から避難場所まで歩いて避難する体験を仮想的にやってもらうことができます。

上空・地上の２画面表示での洪水表現と避難情報の表示

■ 防災研究者として一番大事に思っていることは何ですか。

私はどこにいるときも、今ここで何かが起こったらどうしよう、ということを考えるようにしていますし、地図とライト、携帯の充電器、カメラ、笛も持ち歩くようにしています。でも、人にこうしたらいいですよと対策を勧めながら、自分が一住民として実践するのはなかなか難しいです。首都直下地震が起きたとき、私自身が被害を受けちゃだめですよね。私が被害を受けるということが、防災研究から今まで何を学んできたのかということになりますから。でも実際にそれをまっとうすることの難しさも感じています。

東日本大震災の時も、子どもを駒場リサーチキャンパスの保育園に預けていて、うちの子が帰らないと保育士さんが帰れないという状況もあって、当時 8 キロの子どもを抱っこして、歩き始めました。家まで 3 時間半ぐらいかかり、あまりに重くて、途中何度も心が折れそうになりました。その時の私の判断は正しくなくて、帰らなきゃよかったんです。

CIDIR では 3･11 のあと、被災地で調査をやりましたが、現実を見て、自分自身も備えが足りなかったことを反省しました。たとえば、断水すると洗濯ができずに下着に困るとか、飛散したガラスを掃除したくても、電気が止まると掃除機がかけられないとか、私自身もそれまでリアリティーを持って理解できていませんでした。防災研究者でもイメージ能力不足のところが非常にあり、それを補って少しでも正しい対策や研究をするためには、防災訓練に参加したり、実際に被災地に行って自らの目で見ることがとても大事だと思っています。

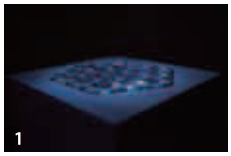
防災の研究って、簡単に被災者数とかを計算します。ある地震が起きたら、全壊建物何棟とか、死者何万人って推計するんですが、その数って単なるデータじゃないですよね。住まいが壊れる、家族が被災するとはどういうことなのか、研究室の学生にも肌で感じて理解した上で、本当に正しい減災対策を考える研究をしてほしいと思っています。

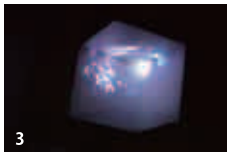
制作展 extra2013

7 月 5 日から 8 日までの 4 日間、『東京大学制作展エクストラ 2013』が、本郷キャンパスの工学部 2 号館 2 階展示室及びフォラムにて開催された。この東京大学制作展は、大学院情報学環・学際情報学府の授業の一環として学生が主体となり企画・運営を行う、テクノロジーを用いたメディアアート作品の展覧会であり、2004 年より毎年夏と冬の年二回行われている。

今展覧会のテーマは、電源ボタンのあのマーク。好奇心やスタートなど、解釈の多様性を残すためにあえて言葉は設定することなく、このマークを一人ひとりの思いの象徴として開催した。

今回は、12 月に開催が決定している『第 16 回東京大学制作展』の中間発表という位置づけで、準備期間は約 3 ヶ月と短い中、各々の思いを込めた 21 作品が一堂に会した。学内向けの公開であったが、約 500 名の方々に足を運んでいただいた。一見難解に思われがちな技術を、作品という形で表現することによって、多くの人に親しみや楽しさ、そして我々学生が各々込めた思いを、実感していただくことができたのではないだろうか。(大島研 M・原田 篤、小川研 M・吉村圭悟)





1:「cell」安住 仁史
2:「onDetect」金丸 修也
3:「float box」甲斐 貴之
4:「重なっていく」三好 賢聖
5:「Smoke Globe」原田 篤

着任教員自己紹介
三谷武司 [みたに たけし] 准教授

2007 年に人文社会系研究科を単位取得退学、それから 5 年間新潟大学人文学部に勤め、任期満了により退職後は、1 年強ほど専業の翻訳家をしておりましたが、このたび縁あって 7 月より情報学環でお世話になることとなりました。最も狭い意味での専門は、理論社会学者ニクラス・ルーマンの学説研究ですが、倫理学・法哲学などにおける規範理論との絡みでアプローチしているのが主流とは少し外れるところでしょうか。その関係で社会的選択理論も少しだけつまみ食いしております。学府では社会情報学コースの教育を通じて、理論社会学に関心のある学生諸君とともに研鑽を積んでいきたいと思っております。今後ともよろしくお願いいたします。

人 事 異 動

教員	任期満了 6/30　Jordan　Sand　准教授 9/30　加藤　綾子　助教 採用 7/1　三谷　武司　准教授
事務職員	配置換 (転入) 7/1　小塚　直美　研究協力係長　（国立青少年教育振興機構より） 武田　浩子　総務係　（地震研より） 配置換 (転出) 7/1　岩沢　秀明　研究協力係長　（日本学術振興会へ） 野仲　容子　総務係主任（本部労務課・勤務労務係へ）

未来へのアーカイブ
原発事故・放射能汚染の過去・未来

フローとして流れ去っていってしまうテレビは、いかに批判の対象となりうるのか。7 月 13 日に駒場キャンパス 21KOMCEE で開催された「未来へのアーカイブ ― 原発事故・放射能汚染の過去／未来」では、福島原発での事故を題材として、テレビアーカイブのもつ可能性が広くそして深く探られた。(主催：「放送人の会」+ 情報学環メディア・コンテンツ総合研究機構)

第一部はテレビの現場を知る二人のテレビマンによる発表。はじめの報告者は元日本テレビ解説主幹で科学ジャーナリストの倉澤治雄氏。スタジオで解説中に三号機の爆発に立ち会った自身の体験を踏まえつつ、アーカイブ装置を駆使することで、テレビが事故報道において果たした役割、果たせなかった役割が具体的に示された。

つづく報告者は、元 NHK プロデューサーで「放送人の会」の桜井均氏。チェルノブイリでの原発事故を扱ったドキュメンタリー番組群を取り上げ、福島での原発事故という「未来」に向けてあらかじめ準備をしていたテレビのアーカイブ的記憶を紹介した。

第二部では、技術的、メディア的に組織された第三の記憶を構成する装置としてのアーカイブの重要性に注意を促した石田英敬教授のコメントを皮切りに、テレビアーカイブがもつ可能性をめぐって活発な議論が展開された。(特任研究員・谷島貫太)

& News

現代韓国研究センター「東京大学・ソウル大学『学生討論会』」

8 月 2 日、現代韓国研究センターは、東京大学・ソウル大学「学生討論会」を福武ホールにて開催した。東京大学からは 53 名、ソウル大学から 32 名の計 85 名の学生が参加し、日本語チーム 1、韓国語チーム 1、英語チーム 2 の計 4 つの小グループで討論した。各チームのテーマは、日本語チーム『日韓両国における大学・大学生の意味』、韓国語チーム『日韓間の理想のメディア構想』、英語第 1 チーム『日韓協力の難しさと可能性』、英語第 2 チーム『留学の西洋信仰〜個人的視点から見た留学「選好」と、その国家レベルでの問題〜』および『日本の科学技術の現状』と、多岐にわたった。

当日は、参加学生全員による全体活動とチーム活動の二部構成で進行し、全体活動はチーム活動の前後で実施した。最初の全体活動では、情報学環：木宮正史教授から、東大側が担当した韓国語チームと英語第 2 チームについて、ソウル大学：南基正教授からは、日本語チームと英語第 1 チームについて、チームプレゼンテーションの紹介があり、また、チーム活動の討論直後の全体活動では、参加学生が討論結果を討論言語および日本語で発表し合った。立食式の夕食会ではチームを超えて親睦を深め、閉会を迎えた。（特任助教・長澤裕子）

記録映画 WS 開催

7 月 7 日、情報学環・福武ホールにて、記録映画アーカイブ・プロジェクト第 10 回ワークショップ「戦後史の切断面（1）〜過疎・開発・公害の記録〜」が開催された。前半では、『忘れられた土地』（1958）、『水俣の子は生きている』（1965）、『汚水カルテ』（1977）の 3 本が上映され、高度成長の陰で疲弊していく日本の漁村や住民たちの記録を視聴した。後半では、ゲストに栗原彬氏（立教大学名誉教授）、四宮鉄男氏（映像作家）、角田拓也氏（イエール大学大学院）を迎え、当時の地域開発が抱えていた社会的問題や、『水俣…』を監督した故土本典昭氏の映画的手法などについて議論が交わされた。当日は 190 名を超える来場があり、大盛況のうちに幕を閉じた。（丹羽研 D3・松山秀明）

夏季入試合格発表

8 月 30 日、平成 26 年度修士課程・博士課程入試（夏季募集・平成 26 年 4 月入学）の合格者発表があった。修士課程の志願者数は、208 名、博士課程の志願者数は、8 名であった。夏季入試の最終合格者数は下表のとおり。

修士課程　最終合格者数	
社会情報学コース	18
文化・人間情報学コース	26
先端表現情報学コース	30
総合分析情報学コース	15

博士課程　最終合格者数	
先端表現情報学コース	2

合格発表の様子

受賞報告

■内川芳美記念マス・コミュニケーション学会賞受賞
林香里教授の著書『<オンナ・コドモ>のジャーナリズム ー ケアの倫理とともに』（岩波書店、2011年）が第4回内川芳美記念マス・コミュニケーション学会賞を受賞し、6月8日、松山大学において開催された総会で表彰が行われた。この賞は優れたマス・メディア研究の著作を対象に隔年で授与されるものである。

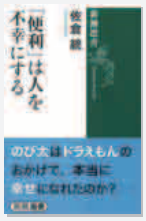
■ITASIA Student won the Best Film Prize at RAI, UK
A research film "Playing with Nan" directed by Dipesh Kharel, a PhD student at ITASIA program has won Wiley Blackwell Student Film Prize 2013 at 13th RAI (Royal Anthropological Institute) International Festival of Ethnographic Film at The University of Edinburgh, UK. The film vividly conveys the unique story of Nepalese migration to Japan in relation to the country of origin and country of destination. The film has been already selected to screen at many international film festivals and universities. Mr. Kharel has been doing visual ethnography of Nepalese migrant workers in Japan for his PhD research. The awarded film is part of his PhD research project at The University of Tokyo.

■暦本教授W受賞
暦本 純一教授が、日本ソフトウェア科学会より基礎研究賞を受賞し、9月に本学で開催された大会で表彰が行われた。受賞業績は「実世界指向ユーザインタフェースに関する研究」。本賞はソフトウェア科学分野の基礎研究において顕著な業績を挙げた研究者に授与されるものである。さらに、ACM UISTよりLasting Impact Awardを受賞し、10月に英国で開催されたUIST2013にて表彰が行われた。本賞はユーザインタフェースの国際学会UISTにおいて発表され、大きな影響を与えた研究論文に対して授与されるものである。

Books

『「便利」は人を不幸にする』

佐倉 統 著 / 新潮選書
2013 年 5 月



福島第一原発事故は、生活の便利さや豊かさばかりを追求することが、ときには大変重大な不幸を引き起こすことを改めて示してくれました。「便利」が不幸を導かないように、科学技術と社会の関係をどうデザインしていけばいいのか？多方面の方々との対話を通じて、紡ぎ上げていった思考の軌跡です。

『メディアが震えた』

丹羽美之・藤田真文 編 / 東京大学出版会
2013 年 5 月

テレビは大災害の実態をどう取材し、報道したのか。ラジオは被災地の人々にどんな情報を届けたのか。原発事故の伝え方にはどのような課題や問題点があったのか。放送局や報道関係者への聞き取り調査、実際に放送された報道・番組内容の分析を通して、テレビやラジオが東日本大震災をどう伝えたのかを検証する。

『はじめて出会う中国』

園田茂人 編 / 有斐閣アルマ
2013 年 6 月

依然として日中関係が緊張する中、「台頭する中国」を理解する必要性は、今まで以上に増えている。ところが、中国の政治や社会の仕組みをわかりやすく解説したテキストは数少ない。本書は、こうしたニーズに応えた、初学者用の中国理解・入門書。谷垣真理子、平野聡といった、本学の中国研究者も執筆陣に加わっている。

Topics

情報学環・空間情報科学研究センター共同シンポジウム開催報告

6 月 28 日、情報学環・福武ホールにおいて、大学院情報学環と空間情報科学研究センターによる共同シンポジウム「ユビキタスで知る空間、ユビキタスで探る人間行動」が開催された。

ユビキタスコンピューティング技術を応用した状況認識のための社会基盤整備が進展するに伴い、実空間と仮想空間、および場所と情報の結び付きが一層強まっている。最近では、地理空間情報活用推進基本法の制定、インテリジェント基準点や電子国土基本図の整備、各種位置情報サービスの展開など、場所情報が社会インフラとして整備された「ユビキタス状況認識社会」の実現に向けた取り組みが進められている。

このような社会的関心の高まりを背景に、情報学環と空間情報科学研究センターでは、空間―情報―人間を総合的に扱う共同シンポジウムを定期的に開催している。今回は昨年に引き続き第 2 回目の開催となり、情報学環から坂村教授、越塚教授、石川、空間情報科学研究センターから浅見教授、木實准教授、雨宮助教による話題提供が行われた。具体的テーマとしては、ユビキタス状況認識のための技術体系と社会制度、空間情報科学の未来、空間情報とオープンデータ、参加型場所情報システム、犯罪データの空間分析、人間の空間行動から見たユビキタスと空間情報が取り上げられ、それぞれに関する最新の取り組みが紹介された。

講演後のパネルディスカッションでは、参加者から様々な意見が寄せられ、パネリストとともに、将来の「ユビキタス空間情報社会」の実現へ向けた現状と課題について活発な議論が行われた。（准教授・石川徹）

ネットワーク仮想化シンポジウム開催報告

9 月 6 日、工学部 2 号館で、第 3 回 International Symposium on Network Virtualization が、Social-ICT x Software-Defined Networking (SDN) & Deeply Programmable Network (DPN) and Beyond というテーマで開催された。本会議は、ネットワーク仮想化技術の広範な普及と国際的な研究協力の推進、および国内外の交流を図ることを目的として毎年開催されている。主催は、第 3 回ネットワーク仮想化シンポジウム運営委員会。電子情報通信学会ネットワーク仮想化時限研究会 (IEICE NV)、情報通信研究機構 (NICT)、日本学術振興会産学協力研究員会インターネット技術第 163 委員会 NVW 分科会 (ITRC) と情報学環が参加している東京大学ソーシャル ICT グローバル・クリエーティブリーダー育成プログラム (GCL) が共催した。

運営委員長とプログラム委員長を情報学環の中尾彰宏准教授が務め、SDN、Network Functions Virtualization (NFV) の展開・導入に関する最新の状況を共有するとともに、網内のプログラム性を発展させる技術の進化の方向性を、国内外の様々なステークホルダーの視点から議論し、ICT を経済社会活動に活用するソーシャル ICT の発展・普及、およびこれを実現するグローバル・クリエーティブリーダーの育成も視野に入れた意見交換が行われた。150 名以上の参加者があり、全て英語のセッションにも拘わらず GCL の学生からも積極的な質問が出て盛会であった。また、会場の後方のホワイエでは、NTT、KDDI、NEC、日立、富士通、東大中尾研究室、慶応大山中研究室、九州大岡村研究室、ストラトスフィア、アライドテレシス、GCL の各社・研究室による動態デモやポスター展示が行なわれた。

ネットワーク仮想化、SDN、NFV 等は産学官ネットワークコミュニティの最大の関心事であり、産業界がかなりの期待をもって、研究開発・商用化をすすめている。また、学術界が更にその先を読んで、Deeply Programmable Network (DPN) のキーワードのもとにデータプレーンにもプログラム可能性を導入する大胆な発想で、近未来のネットワークを定義しようとしており、どのように展開されるか予断を許さない状況である。

今回のシンポジウムは、我が国の国際競争力と連携 (Coopetition) の必要性を広く啓蒙し、今後の研究活動と GCL などに代表される教育活動も推進する上で非常に有意義な結果となった。(准教授・中尾彰宏)

学環学府 40 10. 2013

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府

Interfaculty Initiative in Information Studies
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies,
The University of Tokyo

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

編集委員：暦本純一・前波奈保子・佐藤彩夏

mail：news@iii.u-tokyo.ac.jp / http://www.iii.u-tokyo.ac.jp

あとがき

今年度から製作メンバーに加わりました。このニューズレターは、バックナンバーを見ても学内誌とは思えないようなモダンでおしゃれなデザインなので思わず手に取ってしまう方も多いのではないでしょうか。さらに中身を開くと、情報学環に所属していても知らな内容も多く驚かされます。そんな記事をさらに多くの方に読んでもらえるように、目立ちやすくて分かりやすいデザイン・レイアウトを心がけています。冬号のも是非楽しみにしていてください。（佐藤彩夏）